

ПРЕСТУПЛЕНИЕ И НАКАЗАНИЕ

『罪と罰』注解
КОММЕНТАРИЙ

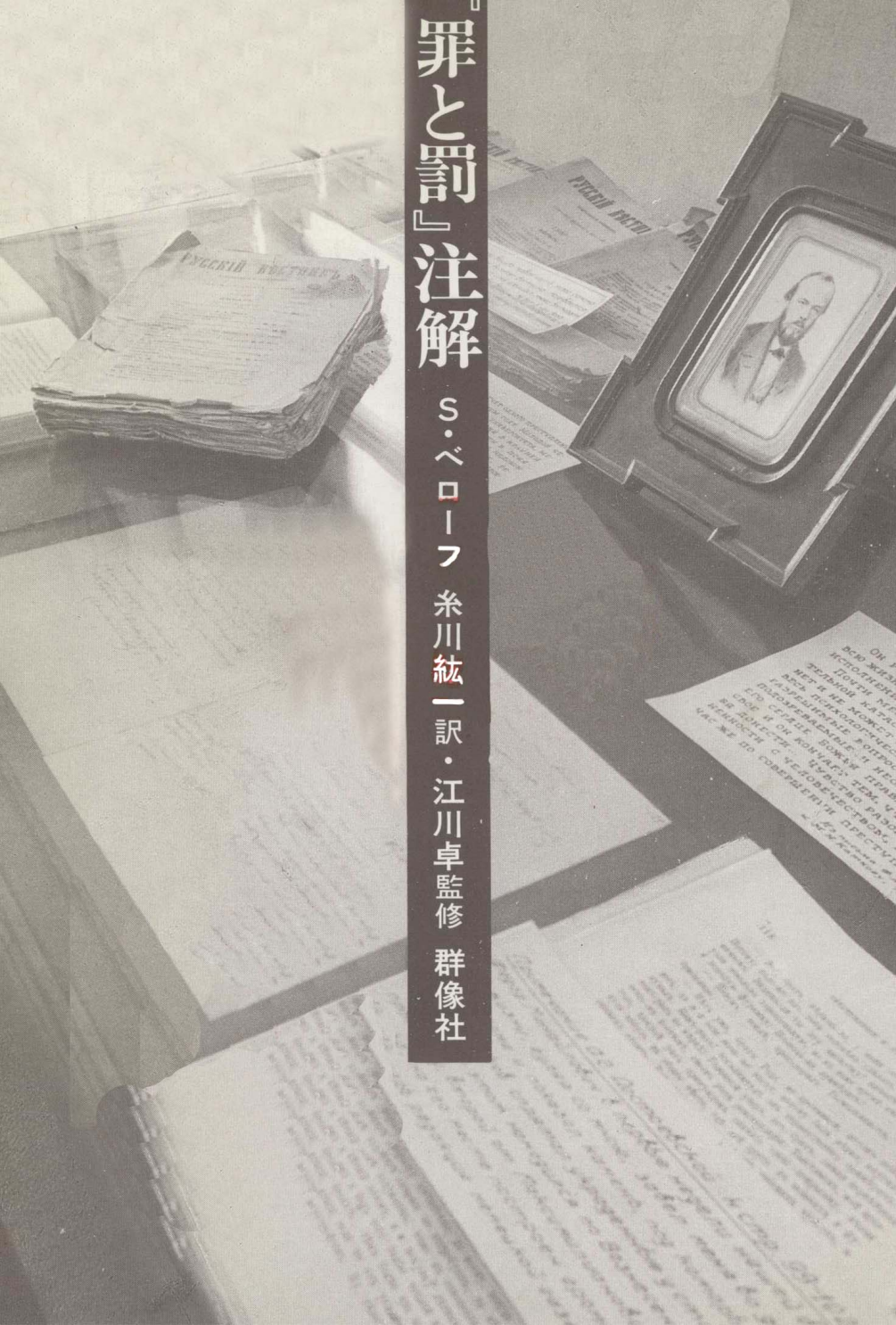
S・ベローフ 糸川紘一訳

江川卓監修

群像社

『罪と罰』注解

S・ペロフ 糸川紘一訳・江川卓監修 群像社



訳者 糸川紘一（いとかわ こういち）

1941年茨城県生まれ。1967年に東京外国語大学ロシア語科を卒業，1973年同大学院スラヴ系言語専攻修士課程を修了。現在，群馬工業高等専門学校に勤務。

著書に『「カラマーゾフ」の天地』（私家版）。

『罪と罰』注解

一九九〇年十月三十日 初版発行 ©

著者 S・V・ペローフ

訳者 糸川紘一

監修 江川卓

発行者 浅川彰三

発行所 株式会社 群像社

〒101 東京都千代田区猿樂町二二一

振替 東京 四一九五九四三

電話 (〇三)二九一六一五三

印刷・製本 岩城印刷株式会社

電話 (〇三)五七九一〇〇六

万一、落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN 4-905821-02-9 C0098

日本の読者へ

私は日本へ一度も行ったことがない。だがもしいつの日にかこの驚くべき国へ行く機会を得たら、私は自分にとって一番大事なことを理解しようと努めるであらう。それはなぜ日本人はあれ程ドストエフスキーが好きなのか？ということである。

私は青年時代に日本の非凡な映画監督黒沢明の映画『白痴』からどんなに強烈な印象を受けたかをよく覚えていいる。それは今までのドストエフスキーものの映画のうち一番よいものである。この映画は多くの点でドストエフスキーの生涯と創作の研究者としての私の運命を決定したのである。

ドストエフスキーが日本において非常な人気を博している理由は一体どこにあるのか？ おそらく、その理由は次のことにあるのだろう。すなわち、正にドストエフスキーこそが苦しい辛酸を嘗めることによって人生を認識させること、正にドストエフスキーによってこそ幸福と人生の意味が苦悩を通して獲得されること、正にドストエフスキーの思想によってこそ苦悩が他人の苦悩、他人の悲運を同情的に理解する鍵となり、人間を道徳的に一層思いやり深くすることを、第二次世界大戦後の日本人が身にしみて痛感した——おそらく理由はここにあるだろう。

あるいは苦悩は有益な意義を持つというドストエフスキーの特に好きな思想に関連して言えば、日本人は第二次世界大戦のあと作家の並々ならず深い、すべてを包括する思想をやはり身にしみて感じたのであろう。それは、各人が万人の前に、万人が各人の前に罪があり責任がある、そして人間は自分の行動に対してのみならず、世界に行われているあらゆる悪に対しても責任があるという思想である。

私は今のところ、なぜ日本人はあれ程ドストエフスキーが好きなのか？という問いに答えることができない。この問いに答えるためには、日本へ行かねばならない。だが私は日本の出版社・群像社が、世界文学の最も偉大な小説の一つである『罪と罰』に対する私の『注解』を出版することにより、両国民の親善を図る上で極めて重要な文化的使命を果たすことを知っている、ただし両国民間の力強い学問的かつ文化的交流は両国民の平和共存の最良の保障だからである。

一九九〇年九月

S・V・ベローフ

レニングラード

序 文

科学アカデミー会員

D・S・リハチヨフ

S・V・ペローフのこの本は世界文学の中でも最も天才的で、また広く読まれている作品の一つに捧げられている。『罪と罰』はドストエフスキーの長編小説のうち、ソ連の十年制中等学校での学習プランに組みこまれている唯一の作品である。ところがわれわれは今日まで、この『罪と罰』のような複雑な作品を正しく読解するのに必要な知識や方法をわが国の教師に与えてくれるような専門の参考書を持っていない。それに加えて、わが国の文芸学もすでに久しく『罪と罰』の注解書を出版する必要性を痛感している。これがS・V・ペローフの著書の出現を歓迎できる理由である。

『罪と罰』の注解は多大の困難を伴う。ドストエフスキーが提起した倫理的問題の尖鋭さ、小説の哲学的問題の複雑さ、ありとあらゆる種類の文学的、その他の影響（レムニサンス）に充満したテキスト、しばしば作品をまったく異なったふうに解釈している、この小説に関する膨大な文献

——これらが『罪と罰』の注解者の前に立ちはだかる主要な困難である。

S・V・ペローフはこうした困難を首尾よく処理して、小説『罪と罰』のテキストを解説するために、紋切型に堕さぬ興味深い書物を書き上げたと言わねばならない。小説に対するすべての注解は、言うならば「具体的事物」にかんする注解と「精神面」にかんする注解とに分けることができる。

ドストエフスキーの作品は真実感を基調としているので、さまざまな「小道具」にあふれている。この「小道具」はドストエフスキーの作品のポエチカの本質的な特徴をなすものである。もしドストエフスキーの作品の出来事が生じた場所を知らない、読者は多くを失うことになる。なぜならドストエフスキーにとっては出来事の生じた環境、情況が重要であるのに、彼はそれを描写するというよりも、むしろ自分にも読者にも「既知のもの」として援用するからである。

このことは『罪と罰』のようなペテルブルグを舞台とした小説に關してとりわけそうである。

もちろん、ドストエフスキーは自分が『罪と罰』において描写したあの石、つまりラスコーリニコフが老婆から盗んだ品物をその下に隠したほかでもないあの石や、ラスコーリニコフが住んでいたあの建物が読者たちによって発見されようとは、また彼の住居の階段の最後の部分が実際に十三段であることが確認されようとは、まさか考えに入れてはいなかっただろう。地理的記述（トポグラフィ）の正確さはドストエフスキーの芸術の目的であつたよりは、むしろ創作の方法なのであつた。

ドストエフスキーは注意深く考え深い読者を信頼していたために、明瞭に言いきらなかったこ

とが多く、自分の世界に読者が精神的に入りこんでくれることを期待していた。この精神的な世界では、ラスコーリニコフが高利貸しの老婆とリザヴェータを殺害する時の斧の様々な位置も、ラスコーリニコフの外貌の描写も、しばしば言及される四階も、まるでラスコーリニコフを「追跡している」かのような「七」や「十一」という数も、この小説の中で最も恒常的な色である「黄色」も、ソーニャがマルメラードフの迎え酒のために渡した三十コペイカも、小説の中でおよそ五百六十回使われている「突然」という言葉も、ラスコーリニコフの犯罪と有機的に結ばれている警察署の二夫人も、またS・V・ペローフが自分の「精神面」の注解に入れている、一見して全然目につかないようなその他数多くのデテールも、意味を持つのである。

S・V・ペローフは、『罪と罰』のような小説の読解に際しては、読者はただ小説をゆっくり読むことによってのみその構想の全体を会得し、ドストエフスキーのまたとない思想の芸術を理解できるようにすることを説得的に示している。そこにおいては文字通りすべてが——数も、名前も、姓も、ペテルブルグの地理的記述も、出来事の時間も、さまざまなシチュエーションも、個々の言葉でさえもが意味をもっているからである。

自序

——A・S・ドリーニンの思い出に捧ぐ——

ロシア古典文学の学習のための教師用参考書のジャンルの中にはすでに久しく個々の文学作品に対する注解のジャンルが存在している。ロシア文学の幾多のすぐれた作品の注解書が出版された。

しかしながらドストエフスキーの長編小説『罪と罰』のようなロシア古典文学の複雑な作品に対する専門的な注解はこれまでになかった。本書は世界文学の最も天才的な作品の一つに対してそのような注解書を創る最初の試みである。

ドストエフスキーは『罪と罰』において自己主張をめざす個人主義的な意識が人類にとって危険であることを並々ならぬ力で明るみに出すことができた。長編小説の巨大な悲劇的な力、「超人」というブルジョア的思想の徹底的な暴露、首都の貧民の生活の社会的条件の深く突っこんだ描写、作家の真の民主主義と人道主義——これらによって『罪と罰』は十九世紀のリアリズム小説の頂点の一つとなったのである。

だがロジオン・ラスコーリコフを動揺させ悩ませた問題は同時に平和と幸福と人生の意味に関する、世界のように古くて明日のように新しい、人間の永遠の問題でもある。

『罪と罰』はドストエフスキーの五大長編小説群（『白痴』、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』）の第一作であり、その中ではドストエフスキーの創造の世界が特別の現実として、生きた精神的有機体として開かれ、そこでは文字通りすべて——どんな些事でも、つまらぬ細目でも——が意味をもつのである。

それ故に筆者はこの注解にありふれた具体的事物の解説（たとえば、『旅行』、『婦人胴着』、『七等文』、『官』といった言葉の解説）と並んで、複雑な哲学的概念の解説、さらには心理的な注解やこの小説のあれこれの人物（ボルフィリー・ベトロヴィチやスヴィドリガイロフなど）に対する文芸学的な評価をも含めた。

またこの注解には『罪と罰』における名前や姓の意味、色や数（たとえば、『七』や『十一』という数）の象徴的意義、この作品におけるペテルブルグの地理的記述、様々な情勢や状況（たとえば、『別れに臨んで妹が記念に』、『ラスコーリニコフの夢』）、一見したところ余り目につかないと思われる幾多の細部（たとえば、『別れに臨んで妹が記念に』、『ラスコーリニコフに贈った「小さな金の指輪』』についていた『宝石』の赤い色、その他）についての解説が含まれている。

筆者は自分の仕事においてソ連及び諸外国の研究者によるドストエフスキーの創作と彼の長編小説『罪と罰』に関する著作を拠り所とした。この小説に関する最も重要な著作の目録は巻末の「文献案内」の部に掲載されている。

本書においてはG・F・コージンが「文学の記念碑」シリーズ（モスクワ、『ナウカ』出版所、一九七〇年）並びにドストエフスキー三十巻全集（第七巻、レニングラード、『ナウカ』出版所、一九

七三年)の中の『罪と罰』の出版のために編纂した注解が活用されている。

本書の基礎となった『罪と罰』のテキストはドストエフスキー三十巻全集(第六巻『罪と罰』、レニングラード、「ナウカ」出版所、一九七三年)のためにL・D・オプリースカヤが準備したものである。とはいえ、この注解はページを追って構成されているので、読者はこの小説のどの版を使用しても構わない。

筆者は原稿に好意ある態度を示してくれた評論家のT・G・ブラージェ、K・N・ポロンスカヤ、S・A・レイセル、E・V・スタリコワ、V・A・エートフに感謝の意を表し、仕事を援助してくれたE・S・キバールジナ、E・V・ペロドゥプロフスキー、A・A・チトーフ、V・N・フォイニーツキーに謝意を表す。

S・V・ペローフ

目次

日本の読者へ Ⅰ

序文(D・S・リハチヨフ) 3

自序 6

I 『罪と罰』について

『罪と罰』の創作史 13

『罪と罰』の詩学ポエチカ 35

『罪と罰』に描かれた時代 49

II 『罪と罰』注解 61

解説 332

訳者あとがき 339

文献案内 360

人名索引 366

凡 例

・『罪と罰』の日本語訳は江川卓訳（学習研究社版）を用い、学習研究社版の訳注と注解が重複する場合は訳注を省略した。

・新約聖書からの引用は日本聖書協会訳（口語訳）を用いた。

・（ ）内の数字で示した文献は巻末にまとめた。

・原文のイタリックによる強調には傍点を付した。

・原著者による補足はへんで示した。

・訳者による補足は〔 〕で示した。

I 『罪と罰』について

『罪と罰』の創作史

『罪と罰』の起原はドストエフスキの懲役時代に遡る。一八五九年の十月九日に彼はトヴェーリから兄に手紙を書いた。「十二月に僕は長編小説を始めますへ……」僕がある告白小説のことをあなたに話したのを覚えていませんか？ それは僕が一番最後に書きたいと思っていたもので、自分でもっと経験を積まなければならないと言っておきました。数日前、僕はそれを即刻書こうと断然決心しましたへ……」僕の心血はあげてこの長編小説に注がれることでしょう。僕はそれを流刑地で、板寝床に横たわりながら、哀愁と自己崩壊の苦しい時期に考え出したのですへ……」告白は僕の名を決定的にしてくれることでしょう。」（十月九日、兄ミハイル宛の手紙）（14）

13 『罪と罰』の創作史

『罪と罰』は最初ラスコーリニコフの告白の形で企てられたもので、懲役の精神的経験に端を発している。ドストエフスキは正に懲役において道徳律の埒外に立つ「強い人格」に初めて出会ったのであり、正に懲役において作家の信念の変化が始まったのである。「この男は——とドストエフスキは『死の家の記録』の中で徒刑囚のオルローフを描写する——際限なく自分を支配することができ、一切の苦痛や懲罰を蔑視し、この世のなにものも恐れないことが明らかでした。彼の内にわれわれが見たものは限りないエネルギー、活動への渴望、復讐への渴望、予定した目的を達成しようとする熱望だけでした。なかでも僕は彼の奇怪な高慢さに喫驚しました。」

だが一八五九年に「告白小説」は着手されなかった。構想は六年間「あたためられ」た。この六年間にドストエフスキーは『虐げられた人々』、『死の家の記録』、『地下室の手記』を書き上げた。これらの作品の主要なテーマである貧しき人々のテーマ、反逆のテーマ、個人主義者の主人公のテーマは後に『罪と罰』において統合されたのである。

一八六五年の六月八日にドストエフスキーはA・A・クラエフスキーに金を無心し、そのさい彼の編集する『祖国雑記』誌に自分の新しい長編小説を売りこんだ。「小生の長編小説は『酔っ払い』という題名で、飲酒という現在の問題に関連することになります。この問題が考究されるだけでなく、そこから派生する一切が、主として家庭の情景、こうした状況における子供の養育などの問題が描写されます。印刷全紙で二十台（一台は十六ページ）以下ではなく、もしかするともっと多くなるかも知れません。」

六月十一日にクラエフスキーはドストエフスキーに断りの返答をした——それは編集部が金がなく小説がたぐさんたまっているためであった。一八六五年の七月二日にドストエフスキーはひどい窮乏状態におちいり、出版者のF・T・ステルロフスキーとやむをえず屈辱的な契約を結んだ。クラエフスキーが長編小説に対して支払いを拒絶したのと同じ三千ルーブルで、ドストエフスキーは三巻の著作全集の出版権をステルロフスキーに売り、そのうえ一八六六年の十一月一日までに印刷全紙十台を下回らない規模の新しい長編小説を彼のために書く義務を負った。

この屈辱的な契約によってドストエフスキーはさし迫った負債を皆済して一八六五年の七月末に外国に出掛けることが可能になった。けれども外国において金銭のドラマは新たなまったく思